

第1回 河内長野市総合計画（第2部会） 議事要旨

日時:令和6年10月21日(月)

午前9時30分から

場所:501会議室

1. 開会

○事務局あいさつ

2. 議事

(1) これまでの意見収集の経緯について（追加報告）

→河内長野市ブランディング担当より、資料1に基づき河内長野市のブランディング事業について説明。

<質疑>

福島委員：環境といえば豊かな自然、緑、水が思い浮かぶが、騒音も計画の中に入れていただきたい。モトクロス場の隣接地では、ありえないぐらいの騒音がある。幹線道路が整備されていると必ず騒音も起こるため、環境には騒音も含めていただきたい。

市事務局：騒音に対する感じ方は人それぞれだが、静けさが河内長野の魅力という市民もいらっしゃる。民間の事業をやめさせることは難しいが、視点としては持っておきたい。

福島委員：緑が多い郊外でテレワークをするなど、自然環境や静けさを求めて入って来る人もいる。今はインナーブランディングを念頭に調査をしているが、最も大切なのはアウターブランディングだと思う。そこにたどり着くまでの程度の期間を想定しているのか。

市事務局：今回のブランディング事業は、発信よりも浸透に重きを置いている。浸透させるには、まず職員が理解して誇りに思っ仕事をする、それが市民に伝わって、市民にもこのまちが良いということが浸透する。言葉で「こんなまちです」と説明するのとは異なる。そのため、期限を決めるのではなく、継続して取り組みつづける。一足飛びの取組は、事業が終わってしまえば何も残らないものになるかもしれないが、そうではなく、自然に河内長野の良さが広まっていくことを想定した事業であり、短期間で達成できるものではないと考えている。

福島委員：長期で取り組むとしても、ある程度の期間を切らなければアウターブランディングにたどり着かないのではないか。

市事務局：ブランディングとプロモーションはまた別の取り組みである。先ほどの発表は、発信するための要素ではなく、どう感じるかの要素を集めたものであり、総合

計画でも感じてもらえるようにしたい。プロモーションでどう見せるかは、この内容をベースに、次の段階で検討するものであると考えており、ご理解いただきたい。

部会長：ブランディングの理念に基づくと、騒音に関しては防音壁を作るという方向性ではなく、自然の力で解決したいという考え方ではないかと思う。理念や今後の目標としては、まとめられたものでよいと思う。

藤林委員：これまでの総合計画では、必ず冒頭に「自然」とあるが、職員による定義づけやイメージはどうか。山があれば、大パノラマという訴えかけができると思うが、河内長野は山があるというより、森林の割合が多いとしか思えない。借景をするなら金剛山もあり、自然に囲まれた歴史的景観もあるが、自然がベースにある割には、何を指しているのかが共有されにくかった。

市事務局：第5次総合計画では、自然を緑、森等として捉えていた。第6次総合計画ではどう捉えるかということかと思う。

市事務局：私たちの中では、「自然が育てていく」ことがキーワードになった。まち全体が呼吸し、河内長野市全体が自然の中で大きく成長するというイメージで捉えたことが画期的であると考えている。そのような意味では、緑、自然体、育てていくという言葉を入れたが、河内長野市全体を育てていくということに取り組んでいきたい。

部会長：私は空気だと思う。

副部会長：自然をどう捉えるかは大事な概念である。人間社会には、自然を加工して共生してきた歴史がある。原生林は河内長野には残っていない。それがもたらす景観美があると思う。また、空気もいいが、水道水の水道水の水質がかなりいいと思う。環境がもたらす空気、水質、土を見ていく必要があると思う。最近流行っているのは、里山一つを保存するにしても、人間が自然と関わる際の境界線の位置づけである。また、それらの総合力として、7月になるとゲンジボタルが見られる。大阪府内でゲンジボタルが見られるところはなかなかない。残していけるとよいと思う。職員のみなさんの中でも、自然についてももう少し議論されて、ブランドイメージに肉付けをしていただけるとよいと思う。

部会長：人間と自然の関わりという視点であると思う。

副部会長：全体的な感想だが、職員もこんなことをやり始めたのかと、いい意味で驚いている。昔から住んでいたが、これまで職員は、決まった施策の実行者であると認識していた。しかし、今はプランナーやコーディネーターの役割を果たして

いる。市民は自分の関心領域でものを考えるから、市全体のことは考えない。生活上起こる問題に目がいきがちなのはやむを得ないので、それを補って市全体の計画を立てるには、市全体を知っている職員が頑張るのがいい。30年前から、プランナーやコーディネーターの役割を期待してきたが、1年半前からしっかり議論して、若い人が頑張っていると思う。議論したことを大事にして、次に進んでいただきたい。

(2) 土地利用について (報告)

→事務局より、資料2に基づき河内長野市の土地利用予定について説明。

<質疑>

垣内委員：外環状線は、今年の5月ぐらいから渋滞が起こっている。商業地域ができればもっと混む。地域の人にとっては家にも入れないような、農業をするにも行きにくい場所になるので、その辺りも考えてほしい。特に夏休みは混む。

市事務局：高向地区にはポテンシャルがある。外環状線が通っていて、くろまろの郷は府下の道の駅ランキングでも1位になるぐらいである。相当人が集まる地区になりつつある裏で、そのような課題もあることは市も認識している。

藤林委員：小山田西地区の堺側は整備されているのではないか。

市事務局：一時的に舗装されただけで、今後拡幅される。

藤林委員：堺側の達成度と河内長野側の達成度はかなり違う。

市事務局：大阪河内長野線は、大阪府が整備する都市計画道路であり、市の判断で道路を整備することはできない。

藤林委員：あの道も堺に抜ければ真ん中を通らずに行ける。良い計画だと思う。

市事務局：堺に抜けると上原が渋滞すると思うので、新しいこと考えなければならない。

副部長：保健センター跡地や駅前の計画はどのような構想か。玄関口をきれいにしておかなければならない。商店街は地権者も多く、アーケードの屋根もめくれたままで長い間放置されているが、あの辺りはどうするのか。駅前はかなり重要な今回の目玉の一つだと思っているが、検討中か。

市事務局：検討中だが、担当部局が考えているのは、ウォークアブルなまち、歩いて楽しいまちづくりである。商店街も、空き地を公園にしてもらうなど、民と連携して、いろんな可能性を踏まえたまちづくりを進めていかなければならない。具体的な構想にはまだ至っていないが、次年度からは体制も変えて進めていく準備をしている。

副部長：これからなら、駅からラブリールホールまでの電柱を地中化すると、すっきりすると思う。いろんな選択肢があるし、うまくマッチすれば国の補助金も使える

ので、検討してほしい。

福島委員：駅前にインキュベーションを作ればいいのではないか。そこを産業の拠点にして、河内長野を企業のまちにすることも考えられる。

市事務局：まさしくそのような拠点になることを想定している。今のようなご意見は非常に興味深く、うまくマッチングできて、企業にも協力いただければ、非常におもしろいことになると思う。

(3) 10年後の「ありたい市の姿」について（協議）

→事務局より、資料 2-1・2-2・2-3 に基づきワークショップ内容について説明。

<各班の発表内容>

1 班：若いクリエイティブな人が 10 年後に集まってほしいという思いがある。インフラ整備が進み、利便性の良いまちになればよい。

また、人が集まる楽しいまちづくりに向けて、河内長野の農業を活用し、農業を守りながら、楽しめるまちづくりが 10 年後にできればよい。

子育てしやすいまちについては、我々を含めた努力が必要であるが、最終的には 10 年後みんなが笑顔で楽しく過ごせるまちづくりを進めてほしい。

2 班：産業について、新しい産業から昔ながらの産業までいろいろなことができるまちになればよい。

自然については、自然のありがたみを感じながら暮らせるまちを目指してほしい。

交通については、必要な場所に必要な時間で車がなくても行くことができるような多様なモビリティのあるまちになってほしい。

情報発信については、特徴的な企画であってもわかりやすく発信されていることで情報のアンテナが張りやすいまちになってほしい。

土地利用については、これまでにない色々な土地の住み方や使い方ができるまち。

コミュニティでは、高齢者から若い世代にかけて、互いにリスペクトしあえるまちというのがあがった。

それらをすべて合わせ、治安の良さもあいまって、定住したくなるまちというのを考えている。

3. 事務連絡

→事務局より、事務連絡について説明

4. 閉会

(以上)